本レポートでは農業農村開発の技術とは何か、そしてその開発・導入をする上で何が重要であるかについて考えている。まず、農業農村開発の技術は農業を営む人々あるいは農村に住む人々の生活に役立つための手段と定義することができる。ではこのような技術を開発・導入するためには何が必要でるか。この問いに簡単に答えると、それぞれの農業農村の人々の本音を把握することが重要であると言える。人々の生活パターンは住んでいる地域、そして各地域の風土や歴史に大きく影響を受けるため、そのような生活パターンを理解し、文化レベルで技術を導入するためにはただ単にアンケート調査を行うだけで不十分であり、現場の声に耳を傾け、正しい課題を設定することが技術者には求められる。

日本の農業の歴史を振り返ってみると、農業技術の発展によりその形態が大きく変わったことがわかる。農業機械が日本の農業に導入される前までは、農家は何でも屋であり開墾・水の確保から収穫・販売までの全てを行っていた。やがて様々な問題に対する相談窓口を農協が担当するようになることで農家は何でも屋から専業へと変貌した。そして、農業機械及び化学肥料の導入により農業生産性の大幅な向上が実現し、農家は力仕事から解放された。しかし、その反面コメの生産調整・減反政策につながり、現代の日本では農業機械が普及し尽したことで後継者がいなくなり、耕作放棄地が増えている。この事実が示すように、技術の導入は生産力の向上を実現するが、技術の普及にはある程度時間が必要であり、急速な技術の導入は環境破壊をもたらし、社会のバランスを崩してしまう。

東南アジア各国は現在日本の農業機械導入前の状態にある。そのような国々において日本の農業の発展により蓄積された知識を伝え、農業農村開発を支援する上で現状を正しく分析し、どのような技術どのような順番で普及させるかを考える責任が技術者にはある。ただ新しい技術を導入すれば生産力の向上につながり、恩恵をもたらすことができるわけではない。対象国にはすでに技術があり、その技術のもと社会が形成されている。新しく導入される技術を人々は本当に必要としているのか、そしてどのような形で導入すれば最善であるかを考えずに導入すれば結局社会に根付かずに消えてしまうことにつながる。

また、現在の先端技術の進歩は目覚ましく、これらの技術を導入することで現地に行かなくても日本から支援対象国の農家に支援を行うことが実現し、大きな技術改革をもたらすことができる。しかし、このような先端技術も他の技術と同様に社会のニーズに応えたものでなければ期待通りの効果をもたらすことはできない。

これから農業農村開発に取り組もうとしている技術者は農業農村社会の本音と適応可能な技術の両方を知っている必要があり、そのような技術者を育てることは簡単なことではない。座学だけではなく、国内や海外における実習を通して多様性のある指導を行うことが重要である。

＜参考文献＞

溝口勝,「農業農村開発の技術を考える」,
http://www.jiid.or.jp/ardec/ardec60/ard60_key_note_g.html , (2020 年 10 月 20 日閲覧)